

創作×ご飯の合同誌

Companio

[カンパニオ]

2017 冬号

Vol.4



(c) 写真 AC

目次

クリスマス・イブ 豆崎豆太

裂けていくチーズ 篠田くらげ

コピ 河寫レイ

三十路リーマンと少女の冬。 ボンゴレーノ麴

年越しそばと除夜の鐘 巫夏希

参加者一覧

クリスマス・イブ

豆崎豆太

待ち合わせの相手を探す人混みが密集しているステンドグラス
「久しぶり」なんて言わない恋人が「どこ行こっか」と笑う週末

「スノーピーカンナッツラテチョコソースホイップ増量」

「……あとカプチーノ」

バカ高いポップコーンも妙に薄いコーラも映画の料金のうち

「泣くために今日はメイクも薄めです」

「女の子って大変だねえ」

あの映画面白かったね（ごめん嘘。君の泣き顔以外忘れた）

一口ごと頬緩ませる君だから一層美味しいミルクジェラート

きらびやかなイルミネーションに包まれて酔っ払いすらサンタに見える
特別な日だからちよつと悪いこと　ごはん、牛タン、それからビール
ご当地と人は言うけど現地民よりは旅行者のための駅ビル
嘘なんかきつとつかない舌だった味噌漬けにされて焼かれたそれは

「ケーキ食べる？」

「ううんいらぬ」

「そうだろうね」

「生パイだったらまだ食べられる」

牛タンの味がしたけど舐めたのは人間の舌　嘘をつく舌
手のひらを合わせて君に怒られる　いただきますと声にはしない

信仰は特にないけど神さまに感謝してみるクリスマス・イブ

裂けていくチーズ

篠田くらげ

彼女の名前は大崎朝子。

私の名前は中崎夕子。

「崎」の字は「崎」の字と区別するために「たつきき」と呼ばれることがある。私たちは名字にふたりともたつききを持ち、しかも名前が逆の意味になっていることから、会社内で「崎子」と呼ばれていた。「崎子、これふたりで頼めるか？」という具合。その度に私たちは自分たちは崎子ではないし、二人セットでもない、と主張してきたが、なんとなくセット扱いにされたまま今日に至っている。私たちは同僚で、同期入社で、ひとりで食べるラーメンが好きだった。

朝子が結婚した。

嬉しいと思った。旦那さんは朝子好みのイケメンで、交際中から他の女の子に言い寄られ

たりしていたが、浮気をしたことは一度もない（と朝子は断言した）。でも、これで私たちは崎子じゃなくなっちゃうんだなあ、なんてことをなんとなく思った。いや、崎子と呼ばれていたかったわけでもないんだけど。

朝子がフランスに行く。

「なんてまあ、ありがちなのよ」と私は言った。ふたりとも気に入りの博多ラーメン屋で、私は生中を飲み干した。「OLやってて、イケメンの旦那さんと結婚して、旦那さんのお仕事でフランスに付いていくの☆なんて、馬鹿なの？これでファッションの勉強始めたりしたら、私、許さないわよ」

「しないわよ」朝子は苦笑する。

「むかつく」。意識がはつきりしていたのに、酔っているふりをして言う。

「何が」

朝子が紅しょうがを食べる。朝子は紅しょうがが好きなのだ。

「なんか、むかつく」

「だから、なにがよ」

朝子が首をかしげる。かわいくない。

「置いてかないでよ、なんて絶対言わない。私にもプライドってやつがあるわけよ。でも『おめでとう、幸せにね』と言うのも嫌なわけよ、なんか」

こんなことを言う自分に苛々する。朝子が答える。応える。

「そうねえ。でもさ夕子、わたしだって何も言えないよ。だってわたし、夕子を憐れんだりしてないし。でも羨ましがってもないし。でもさ、『夕子、わたしあなたが羨ましいわ。自由なもの』なんて言ったら、わたし自己嫌悪で死ぬ。あとラーメン伸びるよ」

朝子はまだ紅しようがを食べている。紅しようが好きすぎ。

「んあ」

私は思いつく。「朝子。今日あんたん家行っていい？」

「OK。旦那を追い出す」

朝子はスマホを取り出す。手際がいい。十秒で会話を負える。早い。

朝子邸はここから歩いて十分ほどのところにある。ふたりで歩く。部長が最近ますますハゲてきたとか、営業の中原君に彼女ができたらしいとか、どうでもいい話をする。

朝子邸はきれいに片づけられていた。朝子のきれい好きは完全に朝子邸を支配している。独身時代と違っているのはお皿が全部セットであることだけだ。

「秘蔵のワインをあけなさい」私はおごそかに命じる。

「イエス・サー」朝子が敬礼する。

ワインを飲みながら二人でチーズを食べる。「ねえ」と私は声をかける。

「裂けちゃうのね、崎子は」

「びーっ」と裂けるチーズを割く。チーズが黙って裂ける。

「裂けないわよ」

朝子が真面目な顔をしてこっちを見ていた。チーズが半分奪われ、食べられる。

そうだろうか。私たちは裂けてしまう。朝子とだけじゃなくて、誰とでも。でも、私は、私たちは、願いつけるだろう。どうか裂けないようにと。そして、裂けたときには、ふたり

がそれぞれに幸せでいることができるようにと。

今回のテーマはチーズよ！ラーメンじゃなく。(夕子)
何の話よ？(朝子)





コピ

「ねえ、こーちゃん…あたしさあ…やっぱりこーちゃんに抱かれるのが一番好きだな……」
サエコはそういうと思いい切り抱きついてきた。生温かいベッドはほんのり汗で湿っていて、作動しているエアコンから吹き出る風の音だけが聴こえている。昂りが収まるとサエコの体温はあつという間に下がってしまうのか、ひんやりとした肌が心地よい。シンガポールの空は夜七時を過ぎてもまだ明るいけれど、ホテルの部屋はカーテンが閉まっている

コピ

河馬 レイ



ねえ、こーちゃん、今度あたしが男にフラれたら、あたしと一緒に暮らしてくれる？あたし、こーちゃんを食べさせたいから。だからこーちゃんは心配しなくていいから。ずっと売れないライターでいいからね？

から外が暗いのかどうかはわからない。チェックインした後はずっとサエコを貪っていたわけだから、時間の感覚がわからなくなっている。わたしの体はもう七時くらいの感覚でいるが、果たしてどうか。
「ふうん…で、やっぱり今回も振られたの？新しい彼とは四ヶ月くらいはうまくいっていたみたいだけど？」

うまく体を反転して、わたしはペットボトルに手を伸ばした。今日はやけに喉が渇く。適度な運動には発汗作用があるから、とりあえず体にはいいに違いない。

「えーなんでわかるかなあ…あたしの顔、そんなに淋しそう？」

「んー…サエコがこんな風にわたしに甘えるってことは、男に振られたに決まってるじゃない」

「ひっどーい。こーちゃん相変わらずひどいわ」
「そうかなー」

サエコはひとしきり満足するとおしゃべりになる。たっぷり抱かれた後は安心しきってしまうため



か、日ごろ溜め込んできたうつぶんを晴らさんばかりにしゃべりまくるのだ。サエコの目はくるくるとよく回り、口元は自由自在に引つ張られたりすぼんだりする。とにかく忙しくて、眺めていても飽きることがないのだ。

「アキラはさあ…あ、彼、アキラっていうのね。最初はやさしかったの。外資系大手のマーケティング・マネージャー。頭もいいしオシャレだし。でもね、だんだん鼻についてきて。まず付き合い始めて二ヶ月後にはあたしのこと『オマエ』なんて呼び始めるわけ。ヤな感じじゃない？」

やれやれ、せつかくひと眠りでもしようかと思つたのに、このまま行くとサエコ・オンステージになつてしまう。わたしにとって純粋な「愛の行為」の後というのは、聖母に抱かれて眠る幼子のようにやすらかなものであらねばならないというのに。

「なんて野郎だろうね。わたしでさえ『アンタ』なんて呼ばないのにねえ」

「でしよう？こーちゃんはそういうところちゃんと

してるよね？なんていうかさ、ていねいな。あたしのこと、ちゃんと尊重してくれてるっていうか。こーちゃんとあたしは、いわばセフレみたいなもので、会えばエッチしちゃうじゃない？でもこーちゃんは何んというか、すごくやさしいの。あたしの好きなこと全部知ってるし、与えることしか興味ないっていうのもすごいし」

「まあねえ…やっぱり無償の愛、かなあ…」

サエコはセックスのことを「エッチ」という。「セックス」より語感がかわいいのだそう。ちよつと古くさい感じもするけれど、そこらへんは妥協しないらしい。

「アキラはさ、あたしが感じてるかなんて関係ないの。あいつは自分だけ気持ちよくなりたくって、こっちは痛いのにぜんぜんお構いなしで。なんかもう我慢するのも限界で」

結局サエコのほうからさよならしたんだろうか？いつもは振られてばかりなのに。

「そうだよねえ。そういうのは我慢しないほうがいい



コピ

いと思うよ？長く付き合おうっていうんならなおさら」

「でしよう？だからあたし言ったの。痛いからやめてって。でね」

サエコは枕を抱きかかえるように、天井に背を向けた。

「もうちよつと時間をかけてやろうよって……」

「そしたら？」

「そしたらさ、そのあと連絡がこないのよ。全然よ？」

「あー……」

「これってなんだと思う？あたしまたフラれたの？」

「んー…それって振られたって言わないんじゃないかな？なんというか、コミュニケーションがうまくいかなかっただけで。すれ違いだよ、単なる。サエコはそのアキラって子のことまだ好きなの？」

「なんかもうわかんない。そんなこと言ったらこーちゃんのほうが好き。こーちゃんはあたしのこと絶

対に傷つけないし、一緒にいて楽しいし、お話もたくさんできるし。こーちゃんなら、ご飯食べに行っても映画を観に行ってもエッチしても楽しいもん。あたしのことすつごく満たしてくれるもん。こーちゃんか女のひととか関係ない。こーちゃんはやさしいのよ」

その割には新しい男ができる途端に消息を断つよね？めっちゃめっちゃわかりやすくいいけど。

フロアに脱ぎ散らかされた服をお互いに着せ合っつて、なんとか体裁を整える。無償の愛の行為の後でもお腹は減るといふものだ。いつも宿泊するホテルはブギスというエリアにあるインターコンチネンタルで、近くのローカル・レストランでラクサを食べたお腹を満たすと、サエコがいきなり長い息をついた。

「ねえこーちゃん、これからコピ飲みに行こうか？」
コピ。Kopi と書く。つまりは東南アジアのコー



コピ

ヒーのことで、これがたまらなく甘い。コーヒーに砂糖と加糖練乳が加わっていて、ホットとアイスがある。応用編もあって、Kopi O(コピ・オー)はコーヒーと砂糖、Kopi C(コピ・シー)はコーヒーと無糖練乳のみだ。サエコはこの砂糖と加糖練乳のフルコースが好きで、初めて飲んだときには「頭痛がするくらいに甘い！」と頭を抱えたくらいだが、やはり飲む度にクセになっていったらしく、今ではシンガポールに来たらコピなしでは生きられないという。ホテルに隣接しているショッピングモールの中にもコピを飲めるカフェは入っているが、今日のサエコの雰囲気では、日本人観光客もたくさんいるであろうと思われるこの場所での会話は憚れる。さて

…
「どこかもうちょっと遠いところで飲みたいな、コピ」
なかなか気が合う。こんなところでも、わたしとサエコは波長が合うのだ。こういう感覚はどうでもよさそうで、実は大事なものだ。わたしはサエコのどうでもいいところが好きだった。些細なことだが

積み重なると大きい。

「勇」(地下鉄)で一本のところにいいところあるよ。
新しいラインができてね」

「新しい線って、ダウンタウン・ラインでしょう？
青いラインの。乗る乗る」

「本当にしょぼいんだけど、いいかな？」

「そういうところに行きたい気分なの、今のあたしは」

「じゃあピツタリだ。行こう」

そう言うと、わたしは週末で賑わっている駅ビルの店の通路をサエコの手を引きながら歩き出した。サエコの目が「こんなところで手なんか握っていいの？」と聞いていた。わたしは軽く微笑んでウインクをした。

地下鉄の中でのわたしたちは無言だった。サエコといえは、駅に着くたびに乗り込んでくる人びとを眺めていた。ヒジャブを被っている女性、ベビーカーを押すインド人夫婦、兵役中なのかミリタリー服姿でスマホを操る若者。韓国語で会話をする家族。車内のモニターには「痴漢は犯罪です」というドラ



コピ

マ仕立ての広告が流れている。発車すると、今度は窓ガラスに映った乗客たちを眺め始めた。

各駅に近づくと、四つの言語で車内アナウンスが流れる。その繰り返しが続いていくにつかされるうちに目的の駅についた。ドアが開くとそこには「美的世界」という中国語の駅名が飛び込んできた。ビューティーワールド駅。この駅の外にそのローカル・カフェがあった。

“Kopi and Kopi C, please.”

こんな時間に飲み物だけかという顔をされた気がするが、問題ない。この通りは小さなローカル・レストランが並んでいて、いわば激戦地だ。海南鶏飯(チキンライス)で有名な老舗の支店も二軒あるが、美味しくなければ三ヶ月で潰れてしまう店もあり、しょっちゅう店の入れ替わりがある。夜九時を過ぎても賑わっていて、かなり活気のある通りだ。「コピってさ、もんのすごく甘いじゃない？頭が痛

くなるくらい。なんでこんなに甘いんだろうって思うの。でもこんなに暑いとこに住んでるんだから、それに負けないくらい甘いやつ飲まないやっつてられないんだと思うの。恋だっけそうなのよ。恋の真っ只中ってその暑さで気が狂っちゃいそうなの。だからもつともつと甘いのが欲しくなって、いっぱいエッチしたくなっちゃうの。でもコピって飲み続けたら死んじゃうと思うんだよね。だって甘過ぎるもん。飲めよって言われてもこっちの準備だつてあるし。飲みたいから飲むんであって、飲めって言われたって飲めないよ。」

「飲めとか飲むとか、なんかちよつと表現が露骨だねえ」

いきなり大胆な会話が始まってやや面食らったわたしは、サエコをたしなめるように耳元で囁いた。「もう！こーちゃん、あたしはいま真面目なの！真面目な話をしているの！」

「はいはい」

「でね、こーちゃんってそこがうまいわけ。こーち



コピ

「あんはあたしが飲みたくなくなるようにしてくれろの。あたしの喉が渴くように、ちゃんとしてくれるわけ。」

「でもさ、サエコのほうは濡れ……」

「もーバカバカ！こーちゃんのバカ！」

「サエコの演説がすごくてさ、なんかこう……つい突っ込みたくなって……」

「こーちゃんはさ、『ほら、本当はのどが渴いてんだろ？飲めよ？』とか言わないわけ。黙ってひたすらあたしに奉仕してくれるの。そういうの、こーちゃんだけなの」

「どうやらサエコは真剣なようだ。セックスについての哲学的アプローチとサエコのあどけない表情がいまひとつマッチしていない。」

「でもさ、こーちゃんってバイなんでしょう？男のひととかともするんでしょう？ちよつとそこんこよくわかんないのよね」

「サエコは顔を近づけると、わたしの目を覗き込んだ。」

「あんなにあたしのこと気持ちよくしてくれろのに、こーちゃんは他の誰かにそういうことしてもらうんだ」

「コピをすすりながら辺りを見回す。店内はひとの話し声で賑わっているにしても会話の内容が少々アレだ。わたしはなんとなく居心地が悪くなって、天井を見つめるふりをして鼻から息を吸い込んだ。」

「そんなこと言われてもねえ……」

「どんな男のひとなら抱かれないって思うの？」

「知らないよそんなこと」

「こーちゃんは男のひととどんなエッチするの？」
「あのさー。そういうのわかんないから。抱くとか抱かれるとか。頭で考えてすることじゃないし」

「ふーん……こーちゃん答えづらそうだね。前からずっと聞いたかったの。こーちゃんさ、フリーライターって言ってたけど本当はどうなの？あんまり儲かってなさそうだし。本当はジゴロなんじゃない？なんかそんな匂いがあるんだよね。お金持ちのママムとかを相手にこう……だってこーちゃん女



心よく知ってるし、扱いもうまいし、なんというか、
ついお世話したくなっちゃうのよね。別にジゴロが
悪いって言うてるんじゃないやなくてね。こーちゃんのこ
ともっとよく知りたくなっちゃったっていうか」

そういうサエコだって自称キャビンアテンダン
トだがそれもあやしかった。なんとなくお互いのプ
ライベートは詮索しないでここまでやってきたか
ら、サエコの職業がなんなのかは未だ不明だ。名字
でさえ知らないし、下の名前に「子」がつくなんて
いまだきダサイ。なのにお母さんはサエなんて名前
でズルい、と言っていたことだけはよく覚えている。
最初に出会ったのは確か知り合いのパーティーで、
なんとなく意気投合して酔った勢いでサエコが宿
泊しているホテルまで転がり込んだんだ。そし
てその夜、サエコの方から誘われて関係を持ったつ
てわけだ。その後は一ヶ月半に一度くらい、サエコ
の方から連絡がきて、サエコが泊まるホテルで会う
といったペース。会えば必ず体を重ねた。実はサエ
コはヘテロだし、わたしはといえばそこらへんの線

引はない。線引するのはどうも苦手だ。白紙に直線
を描きなさいっていう問題だって嫌いなくらいな
んだから。わたしにとつて男とか女とかというのは、
わたしの淫らな指で書く直線みたいなものだ。ただ、
ヘテロな女の子だから「そんなことはしない」とい
うこともないのは確かで、とかく女というものは業
が深い。百合好きな女の子が多いのもうなずける。
まあ実際どれだけの女の子が実践しているかどう
かはわからないとしても。

「ジゴロねえ…それもいいかなあ…」

「こーちゃんって、誰かをもものすごく好きになるこ
とってないの？わたしじゃなくても、誰かをつてこ
と。好きで好きでたまらなくて、ずっと一緒にいた
くて。独り占めにしたくて涙が出るの。そのくらい
好きになるっていう意味だよ？」

「んー…そんなの疲れないかな？しばらくはいい
としても、それってひどく疲れそうだ。それに相手
も自分と同じだけ好きになってくれるとは限らな
いでしょう？」



コピ

「そりやそうだけど…こーちゃんそんなんで淋しくなったりしないの？」

「どうかな…サエコみたいに声をかけてくれる子もいるしね」

「こーちゃんって誰でもいいの？わたしじゃなかったら、他の子でもいいの？」

「それってヤキモチ？」

「ヤキモチっていうか…こーちゃんのこと心配してるわけ。男のひとでも女のひとでも、誰かを一生懸命に思うって大事なんじゃないかなって思うわけ」

「コピは甘過ぎるんじゃないの？飲み過ぎたら体に悪いって言ったのはサエコじゃない？」

「飲み過ぎちゃいけないけど、それでも飲みたくなるのがコピなんじゃない。こーちゃんってわかってるようでわかってないのね」

「体に一番いいのは水だよ」

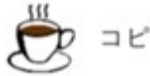
「こーちゃんのバカッ！」

サエコはそう声を荒げると、むくれっ面をして残

りのコピを飲み干した。サエコの脳に激甘の糖分が注がれ、きつとすぐに頭痛がするに違いない。眉間にしわを寄せたサエコの顔はびっくりするほどきれいだっただけだ。

「こーちゃん、どうしてこーちゃんは男のひとじゃないんだらう。こーちゃんが男のひとだったらよかったのに。そしたらわたしはこーちゃんと付き合ってもっともっと好きになると思うの。みんなにこーちゃんを自慢して、しばらくしたらお母さんにも報告するかもしれない。たくさんエッチして、わたし、今よりもっともっときれいになるの。みんなに『サエコ、最近きれいになったね』って言われてさー。そういうの、いいと思わない？」

わたしはサエコのそんなところが好きだ。バカなサエコ。自分のしあわせしか考えていなくて、正直でたくましくて。いつかきつと、冴えないけれどサエコに惚れて惚れて惚れぬいた男と出会ってしあわせになる。イケメンとか肩書とか、そういうのはサエコをしあわせにはしない。サエコの足の裏を舐



めるように愛してくれる男が、いつかきつと見つかるだろう。

コピを飲み終えたあと、中心街の方向までひと駅分一緒に歩いた。暗くなっても安心して女ふたりで歩道を歩けるのはこの国の良いところでもある。いたるところに防犯カメラがあるので路上で下手なことはできないが、二階建てバスが走りさる音がする。街路樹や植え込みの熱帯植物が街灯に照らされている。月はぼんやりとしか見えない。たぶんこの国は明る過ぎるのだ。

駅が近づくと、サエコがぼつりとわたしに言った。「ねえ、こーちゃん、今度わたしが男にフラれたら、あたしと一緒に暮らしてくれる？あたし、こーちゃんを食べさせてあげられると思うよ。だからこーちゃん心配しなくていいから。ずっと売れないライターでいいからね？」

あの日以来、サエコはわたしの前から姿を消した。

サエコから完全に連絡がなくなってからもう一年半経つ。わたしはというと、激甘コピを忌み嫌う女をパトロンに持ち、ライター同士をコーデイナーとする小さな事務所を構えた。サエコはコピの甘さに耐えられなくなったのかもしれない。今頃足の裏でも舐められているのだろうか。生温かい布団の中で。

わたしはというと、そう。激甘のコピを飲みながらこの原稿を書いている。あっけなく旦那を捨てたサエコからのメールが、いつか来るような気がして。

河鷺レイ

海外在住の根無し草。
文芸サークル「鷺田井書店」店主。
短歌同人誌 Cahiers (カイエ)、歌集「花と剣」、小説「化身の森」、写真集「Walk in the Shade」

SNS

Twitter: ray_kwsm

Instagram: ray_kwsm

note: ray_kwsm



※この作品はフィクションです。



三十路リーマンと少女の冬。

ボンゴレーノ麴

「いただきます」が言えることは大事なことだと思
う。

誰と食べているか、もしくは自分一人で弁当を食べ
る時だったとしても、その言葉を言うことで自分は今
から食事をすることだということを再認識できる。単な
る栄養を摂取することとも違う。誰かの手によって作
られた野菜や、自分たちのところまで新鮮なまま届け
られる肉、魚。そこに手が加えられて、楽しみさえ見
出せるほど複雑な味になる。

そんなことを分かっていても、いや、分かっている
からこそやるせなくなる時があるのだ。

重たい体を引きずってどうにか自宅までたどり着い
たものの、冷蔵庫の中にあるのは卵と調味料だけ。年
末年始はスーパーの営業時間が短くなることをすっか
り忘れて仕事おさめだと飲みに駆り出されたのも要因
の一つだ。これで年を越すというのも、なかなか寂
しいことだな、と自分で自分を嘆ってみる。あまり面
白くはない。

夕方と呼ぶにはもう遅い。十九時を回った今の時間
からコンビニに行くのはおっくうだが、致し方ない。

最近の多忙にかまけて、冷蔵庫をただの箱にしてしま
っていたのは他でもない自分なのだから。

両ひざに手を置いて、よいしょと声を出して立ち上
がる。もう年だな、と思うことが、最近はよくある。

不意に、チャイムが鳴った。今は何も通販で頼んで
もないし、この大家は住人達にこまめに声をかけ
るタイプではない。すわ、セールスの類だろうか。も
しくは年末に一人寂しく過ごしているのは前世の業の
せいなのだと祈られるだろうか……そんな突飛な想像
をしながらドアのスコープを覗く。誰の姿も見えな
い。いたずらだろうか、とそこから離れようとする
と、もう一度チャイムが鳴った。次いで、ノックが三
回。トントントン。

ははあ、とそこでようやく合点がいき、チェーンを
外してドアを開けた。

そこに立っていたのは、小さいリュックサックを背
負った少女だった。身長の関係で、スコープから覗い
ても彼女の姿を見ることはできないのだ。その代わり
に暗号のように、チャイムを鳴らしたらドアを三回叩
く、という約束事をした。男やもめの一人暮らしとい
えど、用心するに越したことはない。それに、少女が
一人で留守番しているときにも、知らない大人が呼ん
できたときに気安くドアを開けてはいけないという勉
強にもなる。





しかしまだ小学生になっっていない少女が出歩くには些か遅すぎる時間だ。どうしたのかと声をかけるために目線を合わせようと咄嗟にしゃがむ。すると、少女は背負っていた小さいリュックを下ろし、はい！と目の前に突き出してきた。

「え、なに？これ」

「おそば……としこしそば、ママがもってってやんなさいって」

「へえ……？」

国民的パンヒーローの顔の形をしたリュックには、小さい保温マグと透明なタッパーが三つ入っていた。一つには既にゆである蕎麦、もう二つには、寿と書かれた鳴門とほうれん草、そしてエビの天ぷらが入っていた。マグの蓋を開けてみれば程よい塩気を含んだ出汁の香りが広がり、思わず滲んだ唾液を飲み込む。「これからママとパパと、おばーちゃんちに行くの！くるまでママがまってる。わたしがいなくてもちゃんとしはんたべなきやダメよ！」

「はは、そんな台詞どこで覚えてきたの」

「ママのすきなドラマー」

ふふんっと上機嫌で笑う少女から渡された、一食分の年越しそば。

じゃあね、と嵐のようにやってきて、嵐のように去っていく少女の後ろ髪に手を振りながら、手元にある小さなリュックを見下ろす。

なんだかんだ、今年はずっとあの少女と一緒に居た気がする。春も、夏も、秋でさえも、彼女と何かを共に食べていたように思えるのだ。もちろん、四六時中一緒に居たことなど無いし、自分だけで食事をする方が常なのだ。しかし不意に、美味しいものを美味しいと言いつつ、屈託もなく笑っている少女のことを思い出す。確かに少女は寂しい境遇かもしれないが、悲しい境遇ではない。自分も同じだ。誰かと共に食事ができる喜びを、自分たちは知っている。

今日のいただきますは、一人でもきつと寂しくはないだろう。見上げた夜空には大きな満月が浮かんでいる。

「……卵落として、月見そばにするか」

上手くできてもできなくても、写メに撮って、彼女の両親に送ってやろう。ようやく暖房が効き始めた室内で、小さい鍋を取り出しながらそう思った。

【終】



年越しそばと除夜の鐘

1

「おっ、鐘が鳴った」

ごうん、という音が聞こえて私は割り箸を割った。

ばちん、と箸を割る音が部屋に鳴り響く。

私、この音好きなのよね。年越しそばはここ数年カッブラーメンにしているのだけれど、別にこれくらいはどうだっていい。周りが何といおうとも私はこれがベストなのだから。

「……今年もお疲れ様でした」

両手を合わせて目の前のカッブラーメンに頭を下げる。このことももう三年目になる。一人暮らしを始めてからの恒例行事になるけれど、別に悪くはない。

最終営業日は三日前、二十八日だった。名古屋の市街地にある企業で事務処理をずっと続けているわけだけれど、その会社でも案外ずっと続けていくことが

出来た。庶務自体は多いけれど、普通に定時で帰ることが出来るし、女子会も参加していて、なかなか平穏な毎日を過ごしている。

けれど、年末年始はここ数年一人で過ごしている。実家に帰る手もあるわけだけれど、実家まで新幹線の乗り継ぎで数万円かかることもあるし、そもそも親戚一同へお年玉を配ることを考えると私の給料では払いきれない。だから、毎年実家にだけお金を入れている。それで何とか了解を得ている。

まあ、実情はそろそろ彼氏の一人や二人くらい作れ、と親に言われたくないからなのだけれど。

「私だって彼氏を作ろうと努力はしているのだけれど」

言って、そばを啜る。

合コンにも、相席居酒屋にも行ってみた。けれど、私の好みの男性は見つからなかった。まあ、そんな簡単に見つかるとは思えないし、それくらい仕方ない話ではあるのかもしれないのだけれど。

テレビ番組はいつものバラエティ。タイキックを食らい悶える芸人を見て、思わず吹き出しそうになった。

そんなタイミングで、テーブルに置かれたスマートフォンが震えた。

スリープを解除すると、地元の友人からだった。

『お元気ですかー？ こっちは雪が降ってきました。マッキーは仕事が忙しいんだってね。大変だね。頑張ってるね。こっちは夫婦水入らずで旅行に行っています』

最後にハートマークをたくさんつけて、おまけに夫婦仲睦まじい写真がLINEに送られてきた。

わざわざ仲がいい様子を送り付けてきたのか。何とというか、性格が悪い。そんなことを思いながら、私は直ぐにスリープ状態にした。

「今年も色々あったなあ……」

思い返すと、大変なことばかりだったので、あまり長い時間考えないようにした。

天ぷらそばを食べつつ、スマートフォンを見る。ちようど一年の振り返り記事みたいなものが投稿されているまとめサイトがあったので、そこを見ることにした。

今年は確かに色々あった。

きつと来年も色んなことが起きるのだろう。

そんなことを思いながら、除夜の鐘を聞いていた。

2

午後十一時五十五分。

残り五分になると、どことなくツイッターも重たくなる。聞いた話によれば、日本人のあけましておめでとうというツイートが世界でも有数の高トラフィック案件らしく、その期間中はどうも輻輳が発生するらしい。

「……あと五分かあ」

テレビでもカウントダウンをしている。紅白は今年も紅組の優勝で幕を閉じている。やっぱり、たまに聞く演歌はいいよねえ。バラエティと紅白をザッピングしていたわけだけれど、ついつい紅白に目がいつてしまう。……出来ることなら、かのラスボスが出てきてくれればもっと良かった気がするのだけれど、それは放送局の都合があるのだろう。それについては、私のあずかり知らぬ事情が働いているのだ。きつと。

カウントダウンが始まった。

「5、4、3、2、1……」

テレビに映し出されるゼロの文字を見て、私はテレビに頭を下げつつ、

「あけましておめでとうございます」

そう一言呟いた。

ちなみに年越しそばはとっくに完食していて、もうゴミ箱に捨てている。それにしてもカップラーメンのスープって、どうしてああもご飯を投入したくなるような味付けなのかしら。まあ、それはきつと日本人の味付けに沿ったものとなっているからということと、カップラーメンのスープが濃い味付けになっているからなのだろうけれど。……体重は気にしない方向で。スマートフォンのお知らせが聞こえて、私はスマートフォンを手取る。

メールが二通来ている。一通は知り合いから、もう

一通は……親からだった。

二通とも内容は共通していて、簡単に言えば年賀状のメール版みたいなものだった。そういえば今年も年賀状は出していなかったかな。まあ、別にいいのだけれど。

年賀状メールに返信をして、私は出かける準備をする。

このぼつち年末年始を始めてからというものの、年が明けてから直ぐ近所の神社に初詣に行くことになっている。明るいうちに行ったほうがいいのかもしいないけれど、それでも案外やってくる人は多いらしい。私みたいなせつかな人間が多いのだろう。

ジャンパーを着て、私は外に出る。外はとても寒かった。道を歩くと私と同じように歩いている人たちを見かける。きつと向かう場所は同じだと思う。すれ違う人たちはきつと初詣を終えた感じなのだろう。……あまりにも早すぎる気がしないでも無いけれど。

神社に着くと、人は誰も居なかった。被らないタイミングだったのは大分有難い。別に、あまり人に見られたくないというわけではないのだけれど。

事前に準備しておいた五円玉を賽銭箱に入れて、二礼二拍手一礼。そして今年の健康を祈って、私は神社を後にする。

鳥居でカップルとすれ違った。マフラーを共有していて、見ていてとても理想的なカップルだと思った。

「……今年は、」

どんな年になるのかな。

まあ、そんなことはどうだっていい。

正確に言えば、私が良くなる年になれば、ほかはどうだっていい。

傲慢かもしれない願いを心の中で思いながら、私は帰路につくのだった。

参加者一覧（掲載順）

豆崎豆太(@qwerty_misp)

冬です。雪の降らない冬です。今回は珍しく短歌でページを作ってみました。気がつけばデート連作ばかりやっている……。創作ご飯電子雑誌カンパニオも発足からほぼ一年経ちました。次号は一周年記念号です。参加者様お待ちしております。

篠田くらげ(@samayoikurage)

今回もこんにちは篠田です。今回書きたかったのは「女同士の友情」です。私は男性なのでうまく書けているかどうか心配ですが、お読みいただけましたら幸いに存じます。たまたま裂けるチーズの大喜利タグがT1に出ているので冷や汗

をかきました。次回もよろしく願います。

河寫レイ(@ray_kwsm)

コーヒーが好きです（その割には変なこだわりはない）。市井のひとびとが飲む、お手頃価格の、なんてことのないコーヒーが好きです。できればミルクは欲しいかな。写真も短歌も小説も、生活の全てではないけど、一部ではある。そんなものが好きです。毎日を旅するひとでありたい。できればずっと。

ボンゴレーノ麴(@peperoncino_k)

まさかのリーマンと幼女パイセンの一周年です。来年もゆるゆる美味しいものを食べ続ける二人であってほしいなと思います。年も性別も違う一人と一人が対等な状態でご飯を食べる、というのは何気にとてつもなくすごいことなん

じゃないかな、と思っています。

巫夏希(@natsuki_miko)

年末年始なので、年越しそばと初詣の話を書きました。年末進行はとても大変ですね…。それを思い知らされたような気がします。2017年もよろしくお願ひいたします。